

広き宇内に雄飛する先輩達！

●同窓会で記念誌を！

今日は書初めですが、私の場合は綴り初めになります。年賀状で高校先輩の鳥井さん(11回卒)から、

＊

明けましておめでとうございます「山里梅香る」小学生のとき一生懸命書いた書初めの題です 以来60年大好きな言葉です 温もりとゆっくりとした時間の流れが「郷愁・ノスタルジー」と重なって穏やかな気持ちになります 昨年12月に高校の同期生68人が執筆して 古希記念誌「**広き宇内にII**」(260ページ)を上梓しました 私は「ふるさとを考える」とし 美しい自然と人々のふれあいこそ自分を育ててくれた財産だとの気持ちを含めました

＊

との思いをいただきました。実は、賀状に書かれている「**私たちの古希記念誌『広き宇内にII』 新世紀から十年**」(埼玉県立浦和高等学校第11回・辰巳会)【写真①】を、暮れに頂戴しておりますので、少しだけご紹介させていただきます。

＊

◇発刊にあたって「いつまでも、どこまでも、広き宇内に」 辰巳会・代表幹事 宮崎一幸

もはや戦後ではない(昭和三一年経済白書)、所得倍増論、東京オリンピック、ジャパン・アズ・ナンバーワン、GNP世界第二位、日経平均三万八九一五円、バブル景気と壊滅的な崩壊、銀行破綻、円高、失われた二〇年。われわれが生き抜いてきた七十有余年は激動の時代であった。ただし、振り返れば豊饒の海だったのかもしれない。

紀元二六〇〇年を告げる橿原神宮の大太鼓がラジオで中継された昭和十五年(西暦一九四〇年)の辰年から翌年の巳年にかけてわれわれは、この世に生を受けた。当時、日本は中国に進出し、ロンドンを爆撃し欧州全域を制圧する勢いのドイツと日独伊三国同盟を結んだ。翌年一二月には真珠湾攻撃と苛烈な千宗に突入していく。スタインバックの「怒りの葡萄」(ジョン・フォード監督、ヘンリー・フォンダ主演)やチャップリンの「独裁者」が人気を集め、デュポン社のナイロン・ストッキングの発売が大ブームを巻き起こした等々の事象は、歴史の綾を象徴しているかのようだ。

一九六四年一〇月、かつて見送られた東京オリンピックが開催され、新幹線が開通し、国際通貨基金(IMF)八条国に移行し、日本は再び国際社会の一員に復帰する。ベトナム戦争での北爆開始の不安もあったが、ビートルズ、マイフェアレディの豊かさも実感した。この前後にわれわれの多くは社会人として一歩をしるす。

辰巳会のメンバーのその後の生き様、活動については、本文を熟読していただきたい。私も編集・構成の段階で何度か読み直したが、実に面白い。それぞれが真摯に生き、いま関連に自在を楽しんでいる様子がかうかえるし、自然・環境とも取り組んでいる。改めて友人達の勉強熱心、旺盛な向学心・好奇心には「まいったな！」としか言いようがない。

「尚文昌武」は二代藤井校長の作った“校訓”だが、『文を尚(とうと)び、武を昌(さか)んにす』と読み、尚武ではなく尚文が重視されている点に味わいがある。辰巳会の仲間が意識せずにこの境地に達しているのは、流石である。 <後略。>

平成二四年(二〇一二年)一一月

＊

高校時代の思い出、卒業後の人生、現在の生活、さらには出生から高校入学までの人生など、先輩達のさまざまな自分史をじっくりと読ませていただき感動いたしました。

前回の「**私たちの還暦記念誌『広き宇内に』浦高ルネッサンスから新世紀へ**」(同辰巳会)【写真②】の出版が平成

13年5月でしたから、11年で2冊の記念誌を出されており、そのパワーには脱帽です。前回の記念誌では、多くの方が浦高の記憶を綴られ、さらに社会人

現役として活躍されていらっしゃる日々を、そして第二の人生へ大きく雄飛しようという思いが綴られていましたが、今回はとても味のある文章で、先輩達の文章に対して失礼かもしれませんが、宮崎さんがおっしゃられるように実に面白い記念誌でした。

私が知る限りでは、同窓会の記念誌を出されている代が4回の皆さんが『輝いて 六十歳』と『ありがとう 私の七十歳～愛するものへのメッセージ』、15回の皆さんが「還暦記念誌『自由な時代 選択と起伏』過ぎし60年と、これから…峠の茶屋で」をまとめられています。我が25回もあと2年で還暦、そろそろ準備をしなくてはなりませんね。

